

新著紹介

密教 奥義

権田 雷斧 著

権田大僧正は一宗の碩學なり。曩には密教綱要、兩部曼荼羅通解等の名著を出し、今復密教奥義の新著あり。萎薇振はざる斯界を警醒せらるゝは吾人の感謝に堪へざる所なり。由來眞言密教は六大四曼三密を體相用となし、此の體相用の三大は圓融無礙なるを説く、而してこの妙理を會得せるものは即身に成佛すと爲し、即身成佛を高調す。而かも其教相事相共に、漫りにこれを傳へず師資相承に依り以て今日に至れり。然るに輓近社會の進運に伴ひ遂に眞言密教をして、秘密を公開せしむるに至れり。先年権田大僧正衆望を擔ひ、東都に於て密教の公開講傳を爲し、其講録は、兩部曼荼羅通解、密教綱要として世に行はる。然れどももこれ眞言密教初學者の爲めにせられたるものにして、これを以て深秘なる眞言密教の奥義を盡せりと云ふを得ず。勿論眞言密教をして、道俗共に了解せしむる上に於て、未嘗有の良書たるは、吾人の贅言を要せざる所なり。斯道の研鑽者は、この綱要通解に止まらず、其奥義の一日も速かに世に出でんことを鶴首して待てり。果然教奥義乾坤二卷丙午出版社より發行せらる。吾人はこの密教奥義二

卷により、平素の期待が悉く充たされたりと云ふを得ざれども、前二著に通じたる讀者にして、進んで其奥義を究めんとする學徒には、得難き寶典と謂つ可し。又前二著に依つて初めて眞言密教の門に入りしものは、本書を必ず繙かざる可からず、發見する所多大ならむ。

密教奥義は、乾坤二卷に分ち、乾卷に於ては、眞言教相要隨筆一百章、附録として、冥密進那業十條、全追加三項を收む。坤卷に於ては、眞言事相業隨筆百五十九章を收む。而しては本書の序文にも見へたるが如く、権田大僧正が、眞言密教研鑽五十有餘年間、師が見聞に隨ひ覺知に依り、隨時筆録せられしものなり。故に密教綱要、兩部曼荼羅通解の如く秩序整然たるものに非ず、又これのみに依つて眞言密教の奥義を究むることも困難なり。併し前にも述べし如く、内外學徒の必讀を要するものなり。只こゝに一言すべきは、密教には、弘法大師によつて傳へらるゝ所の眞言宗の密教、即ち東寺一派の密教、普通に東密と云ふものと、傳教大師によつて傳へらるゝ所の天台宗の密教、普通に台密と稱せらるゝものとあり。而かも東密中に於ても東寺の教相と野山の教相との間には幾多の差違あり、又事相に於ては、小野廣澤にそれぞれ流派を異にし、互に口傳口決を重んじ初學者をして屢々疑問を懷かしむることあり。権田大僧正は、新義眞言宗豊山派の碩學に

して、東台二密に通達せらる、而かも其の本領は新義眞言宗にあり。故に古義眞言宗即ち弘法大師の密教を遵守する徒より本書を評せば、論議すべき餘地は多からむ。密教奥義と稱するも、新古を通じ、台密をも抱攝するものと連斷すべからず、このことは網要通解の場合よりも、奥義に於て讀者の最も注意を要することとなり密教奥義二卷は要するに、密教研究者の必讀すべき良書として推賞して措かざるものなり。(和装二卷 定價四圓丙午出版社)(烏越道眼)

禪宗綱要

秋野 孝道著

目次 第一編 總説 第二編 禪宗の相承 第一章 禪及禪宗の起原 第二章 印度の相承 第三章 西天四七の祖 第四章 支那の相承 一、達磨以前の禪法 二、祖師西來 三、東地二三の祖 第四章 禪宗の分派 一、牛頭禪 二、南嶺北漸 三、青原南嶽の二系 四、五家七宗 五、看話と默照 第六章 日本との相承 一、鎌倉以前の禪 二、榮西道元の兩禪師 第七章 鎌倉以後の臨濟宗 第八章 曹洞宗の傳播 第九章 徳川時代の禪宗 一、黄檗宗の傳來 二、臨濟宗の復興 三、曹洞宗の隆盛 第十章 明治以後の禪宗 第三編 禪宗の宗意 第一章 禪の本領 第二章 正法眼藏 第三章 宗名 第四章 所依の經典 第五章 坐禪辨道 第六章 家風の意義 第七章 五家禪風の異同 第八

章 臨濟曹洞の兩禪風 第九章 洞山大師と臨濟大師 第十章 四料簡と五位 一、四料簡 二、五位 第十一章 看話、默照の兩禪風 第十二章 公案に就て 第十三章 坐禪に就て 第十四編 禪と戒 第一章 禪門と實踐 第二章 坐禪の儀則 第三章 坐禪と悟 第四章 坐禪の功用 第五章 戒法 一、禪戒 二、戒の意義 三、戒源 第六章 十六條戒 第七章 戒法受持 一、開遮持犯 二、止惡と作善 三、受戒及其次第 第八章 禪戒一如 第五編 結言、

著者は曩に曹洞宗大學長として 令名あり、現に遠州可睡齋に和光同塵し、幾百の雲納を針黹しつゝある作家の職將、將に天下の輿望を負ひ、法幢を高く大本山永平禪寺に建てんとする學徳兼備の大家匠なり、此の師家にして此の著ある、其の内容の充實、完備推して知るべきのみ、

由來、禪門に關する著述は實に汗牛充棟も畜ならず、殊に明治の末葉以降を最も甚しとなす、されど、之等を一々點檢し來らば羊頭を懸けて狗肉を賣る底のもの其の半を過ぐと云ふも決して誇張の言に非るなり、甚しきに至つては眼に一丁字なき(宗門上)所謂學者の揣摩臆測に成れるものすら枚擧に遑あらざるなり、彼等の所論は壯は壯なりと雖も彌々眞に遠かり、快は快なりと雖も益